

ツルウメモドキ

Celastrus orbiculatus

ニシキギ科

名前の由来

つる性でウメモドキ（モチノキ科）に似た木という意味。ウメモドキは「梅に似て非なるもの」という意味だろうといわれている。漢字名：蔓梅擬



ツルウメモドキ

形態的特徴

つる性木本、他木にからむ。つるは左巻き。葉は楕円形～倒卵円形で長さ5～10cm、先はやや円く急にとがる。互生。雌雄異株、花は淡緑色、径7mm、5～6月開花。果実は黄色く、球形で径8mm、3裂し黄赤色の仮種皮が見える。10月に成熟、落葉後も枝上に残る。

類似種との見分け方：ツルウメモドキは葉の縁のギザギザ（鋸歯）が波状で、あまり鋭くない所で区別できる。オニツルウメモドキは下面脈上に小突起毛がある。



ツルウメモドキの雄花 ツルウメモドキの雌花 ツルウメモドキの実。
ヒヨドリなどの冬の餌に



ツルウメモドキの葉。ギザギザがあまり鋭くない



ツルウメモドキの樹形。
上一枝先近く、下老木の幹



ツルウメモドキの樹皮と冬芽



ツルウメモドキの冬芽

ツルウメモドキの葉の付き方

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期		■										
結実期							■					

生育環境・分布

山野に生える落葉つる性木本、他木にからむ。日当たりの良い所。

分布：国外分布は、南千島、台湾、中国、朝鮮など。国内

分布は、北海道、本州、四国、九州、琉球。北海道内分布は、全域か。

十勝地方生育状況は、全域。

繁殖生態・寿命

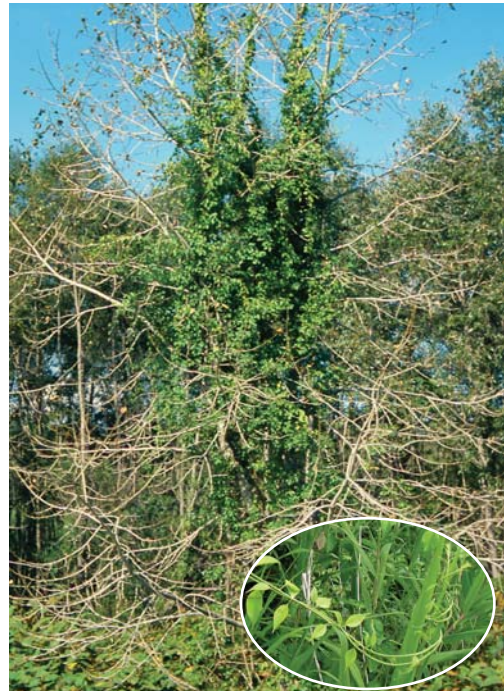
5～6月開花。果実は黄色く球形で径8mm、3裂し黄赤色の仮種皮が見える。10月に成熟、落葉後も枝上に残る。鳥などによって種子分散されていると考えられる。寿命は不明。

他生物との関わり

実がヒヨドリなどの冬の間の餌となる。鳥などによって種子分散されていると考えられる。

植栽関係

土壌：砂質壤土、適潤性～弱湿性～耐乾性、通気性は中程度の場所、pHは耐アルカリ性、堅密度は堅い場所でも耐える。光は中間性～陽性木。直径4cm、根系の最大深度45cm、根の広がり半径0.6m。根の支持力は中程度。移植は容易（特に落葉時）。根伏せ、実生、取り木、接ぎ木などで育苗する。春先太い根を掘りだして15～20cmの長さに切りそろえ、斜めに赤土に埋めると芽を出す。切り接ぎは早春に、挿し木は6～7月に新梢を川砂に挿す。



ドロヤナギを覆い隠す程になったツルウメモドキ。円内は近くの草に巻き付き始めたところ

興味深い話

- 庭園樹、公園樹などに用いられ、生け花や観賞用の他、薪を縛る縄にも利用される。
- 十勝地方のアイヌ語で「フレハツプンカル」という。
- アイヌの人々は皮をそいで、内皮から繊維をとった。この繊維は真っ白で重宝され、タカ（弓弦）、オッカイタラ（男の背負い縄）、ラウクツ（女の下紐）に使われ、シナノキの皮（クペルケブ）より強いと喜ばれたという。
- 繊維のとり方は次の通り。冬、つる状の枝を1本ずつ縦に半分に割り、樹皮をはがし、樹皮を内皮と外皮に分け、内皮を束ねて熱湯に数分間つけ（濃い緑に）、それを戸外

に4週間ほど放置して、白い繊維となる。

〔つる植物について〕植物で他のものに依存して高く伸びる形は、次のように分けられる。

1. 茎そのもので林木に巻き付いて登るもの ツルウメモドキ、サルナシ、マタタビ、チョウセンゴモシなど
2. 吸収根（付着根）が林木に吸い付いて登るもの ツルアジサイ、イワガラミ、ツタなど
3. 巻きひげを林木に巻き付けて登るもの ヤマブドウ、ノブドウなど

配慮事項

直径4cm、根系の最大深度45cm、根の広がり半径0.6m。根の支持力は中程度。移植は容易（特に落葉時）。挿し木は

6～7月に新梢を川砂に挿す。

参考文献

- 「改訂増補 牧野新日本植物図鑑」牧野富太郎 著 小野 他編集 北隆館 1989
- 「図説花と樹の大事典」木村陽二郎 監修 植物文化研究会・雅麗 編集 柏書房 1996
- 「新装版 樹木根系図説」苅住昇 誠文堂新光社 1987
- 「北海道 樹木図鑑」佐藤孝夫 亜瑠西社 1990
- 「新版 北海道の樹」辻井達一・梅沢俊・佐藤孝夫 北海道大学図書刊行会 1992
- 「北海道 庭と庭木のすべて」原秀雄・須田輝 北海道新聞社

- 1978 「アイヌ植物誌」福岡イト子 草風館 1995
- 「森林で遊ぼうシリーズ1 おもしろい木の話」北海道立林業試験場 監修 北海道林業普及協会 1996
- 「日本の野生植物 木本II」佐竹義輔・原寛・互理俊治・富成忠夫 編 平凡社 1989
- 「山川弘氏からの聞き取り記録」内田祐一（未発表）
- 「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館（編）、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）
草花

（外来種）
草花

哺乳類

（水辺）
鳥類

（草原・樹林）
鳥類